

終戦に続いて家族の形成

勲は大東文化学院を卒業後、直ぐに見習士官として陸軍に入隊しましたが、網膜剥離を患い国内に留まって後方任務に就いていました。1945年8月、終戦を迎えて軍務を解かれ故郷の山梨県北都留郡富浜町鳥沢の養母きく江の下に戻りました。戸主として収入の目処を立てたい勲でしたが、従軍経験者は公職に就けないという法規制があった為、教員への道は閉ざされていました。ところが旧制中学時代の恩師が母校の都留高等学校の校長に就いていらっしゃり、校長の一存で採用可能な代用教員として受け入れて貰うことになりました。こうして勲と母との二人の生活の安定が得られたのです。

この時住んでいたのは勲の父博が建てた家で、中央線の鳥沢駅の北側に平行に走る甲州街道沿いで、駅から新宿方向に徒歩十分ほどの道の程の北側にありました。東南に玄関のある二階家で、玄関の土間の正面に2段ほどの上り口がありました。その北東側には台所があり、正面から西側に続く廊下の左(南)が畳の部屋、廊下の右(北)が洗面所になっていました。二階に上がる階段と風呂場の位置は記憶がありません。多分勲は二階で寝起きし、養母きく江は一階で寝起きしていたのだと思います。

勲は鳥沢駅から中央線に乗り、大月駅で下車して徒歩十分程の都留高等学校に通っていました。これは旧制中学の頃の通学路で、通り慣れた道でした。養母きく江の作った朝食を食べて職場に向か

い、学校で昼食を採り、帰宅後にきく江の作った夕食を食べていたでしょう。当時の食糧事情から考えると、昼食もきく江の作った弁当ではなかったと想像します。

生活の確立に伴ってか早々と縁談もまとまり、尋常小学校時代の同級生であった井上泰子を娶りました。井上家の第一子として生まれた泰子は、山梨県都留市谷村町で育ち、武蔵野音楽大学を卒業して水戸女学院の音楽教師の職に就いていました。戦況の激化に伴い、米軍の茨城海岸上陸を危惧した父の正義に呼び戻され、実家で過ごしていた時に縁談が始まりました。結婚後早々と、翌1946年9月に第一子の峻が生まれ、終戦から一年と僅かの間に石井家は二人家族から四人家族になったのです。大変慌ただしい一年だった事でしょう。

泰子は、石井家から徒歩五分ほどの鳥沢中学の音楽教師の職に就いていましたが、縁談、結婚、出産と続いた時期の何時から勤務を始めたのかは聞いておりません。泰子は教職を愛して止まない人でしたから、実家に戻ってからも教職を続けたかったことでしょう。しかし、近くに他の選択肢があった中で、電車通勤しなければならない鳥沢中学を態々選んだとは考えられません。結婚後に新居近くの徒歩通勤できる中学に音楽教諭として採用されたと思われます。

従って、きく江が家事を担当するのはそれまでと変わらず、二人分が三人分に、更に四人分へと増えたのだと思われます。

大月市鳥沢から八王子市に移住

代用教員だった勲は、ほどなく公務着任が解禁になり、正式に山梨県立都留高等学校の教諭となり、国語・漢文・英語を担当して収入を得ていました。妻の泰子は鳥沢中学の音楽教諭として収入を得ていましたし、養母のきく江は亡夫博の年金を受けていたものと思われます。物資が欠乏して米は配給で賄っていた頃で、物価が急騰している時代ですから、家族四人の生活は決して楽ではなかったでしょうが、それなりに収入が確保できていたようです。また、家の北側には狭いながらも畑があり、また徒歩十分ほどの所に畑を持っていましたから、養母のきく江が中心になって野菜を栽培していたと思われます。

きく江、勲、泰子、峻の四人生活の日々について、殆ど記憶はありませんが、多分夫婦と子供の三人は二階で寝起きし、きく江は一階の畳の部屋で寝起きしていたものと思われます。一階の畳の部屋には掘り炬燵があって、きく江が寝る時には炬燵を除けて寝ていたのでしょう。この炬燵で暖を取りながら、業界雑誌の「国語教育論」を読んでいた勲の膝に峻が上がり込み、表紙の「教育」という文字を読んだ話を、勲は著書「0歳から始める脳内教育」などで紹介しております。二歳に満たない峻の記憶には全く残っておりません。

この頃の日常生活について、峻の記憶は殆どありませんが、随分

多忙だったと想像できます。朝早く勲が出勤し、続いて泰子が出勤し、残ったきく江が家事をしながら峻の面倒を見、泰子は帰宅すると家事を分担しながら峻の面倒を見、勲が帰宅すると皆で夕食を採るという毎日だったと思われます。こんな多忙な毎日の為か、きく江が「峻の面倒は見ない。」と言い出す時があったそうです。泰子の実家に預けられ、日暮れ時にめそめそ始める峻を祖母ふくがおんぶし、近所の時計屋で柱時計の振り子を見ながら、峻の寝付くのを待ったとの話を聞いています。壁一杯に並んだ沢山の掛け時計の振り子が、一斉に揺れ動く景色を、^{かす}微かに覚えています。また、きく江が竹籠に峻を入れ、周辺を歩きながら寝かし付けて貰った記憶も、^{かす}微かに残っています。更に勲が学校に連れて行き、昼食を勲の膝の上で食べたこと、泰子が学校に連れて行き、授業中に校庭で遊んでいる峻を、池で飼われていた^{あひる}家鴨が追いかけたことなどは、勲と泰子が話してくれたことで、峻自身の記憶には全く残っていません。

このような生活環境の中で、勲は教鞭を振るっていましたが、高校生の漢字の読み書き能力が余りに低いことが気になるようになりました。学生たちはそれまでの数年間は戦争中で、出征兵士の穴を埋めるための労働に従事したり、兵士になるための体づくりを強いられたり、殆ど勉学の機会がありませんでしたから、無理もない話でしょう。しかし、勲は話をそちらに持って行きませんでした。「中学時代の教育に問題があったのではないか。」と考えたのです。こう考えたことが

「石井勲の漢字教育」の出発点になりました。その第一歩は、漢字の読み書きの能力を高める為の教育手段の探求だったのでした。

勲は自らの目で中学教育の現場を確かめるため、校長に転職を申し出ました。そこで受け入れて貰えたのが八王子市立第一中学校でした。一方、泰子も八王子市立第六中学校に転勤することになりました。きく江は鳥沢に残り、博の年金と畑の収穫で生計を立て、勲と泰子は二人の給料で一家三人を養うことになったのです。八王子の住まいは、泰子の通う第六中学から徒歩十分にも満たない近くに戸建てを借りることができました。八王子市立一中は大分遠くだったので、勲は自転車通勤していたと思われます。

中学校教諭から指導主事へ

1950年4月から、勲は八王子市立第一中学校で国語を教えていましたが、中学生の漢字の読み書き能力が余りに低いことが、高校教諭の時と全く同じ気になりました。そんな時に八王子市に教育委員会が設置され、1951年の4月1日から、勲が指導主事として出向するよう、第一中学の校長が計らってくれました。この辺りの経緯は、「一年生でも漢字が読める」「第二章 漢字に強くなる秘訣」「3 石井方式はこうして発見した」などで、詳しく書かれています。

勲の持つ教員免許は、中学高校が対象のものなので、「中学生

の漢字力が低いのは小学校教育の欠陥によるものではないか？」といくら悩んだところで自ら現場に入って確かめることはできません。そんな中で指導主事の職を得たのですから、絶好の機会だと思いました。小学校教諭との懇談の機会がある毎に、漢字教育の方法について議論しました。小学校一年生の国語の教科書は、当時も戦前も変わらず、総仮名書きの短い文が書かれていました。勲は、「世の中で、普通、漢字で書かれているものは、小学一年生と云えども最初から漢字で示すべきである。」と主張を繰り返したのですが、小学校教諭は賛同して呉れませんでした。

当時は1948年に告示された「当用漢字別表」に基づいて教育が行われていた時代で、義務教育で扱う漢字は881字でした。また、学年毎の割り当てについての規定がなかったので、教科書に新しく示される漢字が、出版社によって異なる状態でした。これを是正する為か、1958年に告示され1961年に施行された小学校学習指導要領には学年別漢字配当表が添付されました。この別表には注意書きが付いており、「配当されていない漢字は提示してはならない。」と書かれています。勲が漢字で提示すべきだと主張したのは「学年別漢字配当表」制定前の時期だったので、法規制に反するものではありませんでしたが、教諭は教科書を用いて教育を行うのですから、教科書の既存の文章を漢字に書き替えて教えなさいと言われても、容易に受け入れられなかったのは当然だったのかも知れません。

それでも。三つの小学校の夫々一人の先生が実験に協力して下

さいました。僅かな勢力でしたが、朝日新聞がこの活動を見つけ出し、東京都下版に記事が掲載されました。勲は大いに勇気づけられたことだったでしょうが、これで一挙に事態が好転することはありませんでした。記事が掲載されたとはいえ、殆どの小学校教諭は石井勲の方式を「机上の空論」として受け止めていたのだと思われます。そこで、勲は一念発起し、教員資格を改めて取り直し、自ら小学校の教壇に立つことを決心しました。資格取得のために最初に手掛けたのは、ピアノを弾くことでした。妻の泰子がピアノを所有していましたので、子供たちと一緒にバイエルの練習から始めました。最初は勲が一番上手でしたが、峻に追い抜かれ、倫子に追い抜かれて行ったことは、著書にも書かれています。

八王子市^{よろず}万町での生活

この頃住んでいたのは、八王子市^{よろず}万町二丁目の借家で、八王子駅南口から南西に十五分程の所にありました。八王子を南北に貫く横浜街道から西に一筋離れた道沿いにあり、東に玄関のある東西に細長い老朽化した平屋でした。玄関の右が台所、左が炬燵のある四畳半の部屋で、台所の北西に風呂が接していたと記憶しています。玄関から西に廊下が伸びていて、右側に六畳の畳の部屋がありました。廊下の先の右側に便所があり、左側には畳の部屋がありました。この奥の部屋は普段は使っておらず、「離れ」と呼んでいま

たが、泰子の従兄弟が大学受験の準備期間に寝泊まりしていたことを覚えています。峻はこの^{むらまさ}村正さんから折り紙の軍艦を教えて貰った記憶があります。家族四人は中央の和室で寝て、昼間は炬燵のある部屋で過ごしました。幼い子供二人の四人家族が住む家としては、当時としては十分広い家だったのです。

この家での泰子の生活は多忙を極めていました。引っ越した年の七月に第二子の^{みちこ}倫子が生まれ、授乳の為に講座の合間を縫って家と学校を行き来しました。更に食事の準備も、その他の家事も行っていました。とても^{こな}熟し切れるものではありませんでしたので、義母きく江や母ふくの助けも借りた事だと思います。峻が台所の床を踏み抜いた時、祖母のきく江から「峻の所為じゃないよ。」と慰めて貰った記憶があります。それでも両母親に頼むのには限界があります。親戚を伝って紹介された「お手伝いさん」が一緒に暮らしていました。多分西の端の「離れ」で寝泊まりしていたものと思われませんが、峻の記憶には全く残っていません。

こんな泰子の負担を少しでも軽減しようと考えたのでしょう。勲が通勤の際に峻の送り迎えをして、幼稚園に通わせることにしました。ところが、たった二日通ったところで諦めることになりました。峻が幼稚園で泣き通して、声を枯らしてしまったので、継続を断念したと聞いています。峻の記憶は全くありません。その後、峻は小学校入学前の一年間、勲の勤務先に近い「本町幼稚園」に通いました。その送り迎えは自転車であったり、バスであったり、勲の通勤の都合で選ばれてい

たようです。自転車もバスもどちらも乗せられていた^{かす}微かな記憶があります。

小学校教育の始まり

小学校教諭の資格取得に成功し、1953年4月から、勲は新宿区淀橋第一小学校に転職し、一年生を教えることになりました。計画が実現したのは峻が八王子市第三小学校に入学するのと一緒だったのです。

小学校の教育現場で勲が始めたのは、仮名書きの教科書に張り込むための漢字仮名混り文の作成でした。四畳半の炬燵^{こたつ}の部屋で、勲は炬燵^{こたつ}に入り、謄写版原稿を毎晩作っていました。当時、複写機は大変高価な道具で、学校で配布する印刷物は全て謄写版を使って自ら孔版印刷で作っていました。両面に蠟^{ろう}を引いた丈夫な紙を鑪^{やすり}の平板に乗せ、鉄筆で字や絵を書くと細かな穴ができ、それが原稿になります。これを謄写版の網目に貼り付け、インクを付けたローラーを押付けながら転がすと、下にある用紙に印刷できるのです。原稿を謄写版から外すと、再び使用することができなくなるので、毎回新しい原稿を作らなければなりませんでした。

勲は授業の進捗に合わせ、平仮名書きの教科書を横目にみながら、教科書に書かれた平仮名の文章の寸法に合わせて漢字仮名混り文を書きました。後にパソコンが発達してからなら、幾つかのア

プリケーション・ソフトを駆使すれば、原稿作成が迅速にできるし、作った原稿を保管できます。一方、謄写版原稿は一度しか使用できないのに、作成に大変な労力を要します。その努力が報われたことは、著書(例えば、「私の漢字教室」の「第1部 新方式による実験報告」の「第2章 異なった方式による二つの実験」)の中でも触れられています。

この頃から石井勲は漢字を読むことを重視し、漢字を書くことは求めないという方針で臨んでいましたが、淀橋第一小学校の生徒は、漢字を書くことにも優れていました。でも、石井勲の漢字教育の「漢字で教える」には至っておらず、「漢字を教える」気持ちの方が勝っていたように推察されます。そんな淀橋第一小学校の生徒は、漢字の読み書き能力に大変優れていましたが、国語以外の科目でも優れた成果を示していたようです。小学校の教諭になるという決断が、大きな成果に繋がって、充実した毎日を過ごしていた事でしょう。

こんな万町での生活は、少しずつ経済的な余裕が出てきたようです。勲は峻にロビンフッドの絵本を買ってくれました。人形を並べて撮影した写真に、物語が書かれた絵本でした。ところがロビンフッドが、絞首台に上がった場面で、腰に角笛が付いていることに峻が気付き、「角笛を吹けば直ぐにでも仲間が助けに駆け付けるに違いない。」と、勲に言ったそうです。勲は早速本屋に行き、店主にこの話をしたところ、大いに感心してその絵本シリーズの残りの数冊をプレゼントしてくれたそうです。白雪姫、シンデレラ、人魚姫などがあったと記憶しています。

もう一つの思い出は、淀橋第一小学校の野外授業に同行したことです。峻の活動の世界を広げるいい機会だったと大いに感謝しています。

住居の新築

八王子市^{よろず}万町に暮らすうちに、家屋は増々老朽化し、経済的余裕も増えたところで、家屋を建て替えることになりました。1955年頃に建築を開始した新家屋は、その辺りではまだ珍しい二階建てで、一階の北東に台所、風呂、便所があり、東南に炬燵を掘った居間がありました。これらは従来あった家の配置と同じでした。従来その西にあった寝室は二階に作られ、西南には板張りの床の洋室、北西には畳の三畳間が配置されました。これ以降何人かのお手伝いさんが寝室に利用したものです。南の中央に玄関があり、廊下が北に続いて、各部屋が繋がっており、二階への階段も設置されていました。二階の東側は「子ども部屋」と称していましたが、机を置いてあったものの使った記憶はなく、宿題は居間でやっていました。洋室にはピアノと大きなソファなどが置かれ、泰子は本格的にピアノ教室を始めました。ソファは背を倒してベッドになるもので、来客の寝室としても使われていました。

借地の上に建てるとはいえ、勲が建てる最初の持ち家です。泰子の父、井上正義は大喜びで、多大な支援をしてくれました。庭の南端

に大きな岩に囲まれた池を掘り、周りに沢山の木が植えられましたが、これらは皆正義の支援によるものだったようです。これらの木々のうち、背の高い柘植の木と、赤い葉で芽生える枝垂れ紅葉^{もみぢ}の二本は、2023年現在も八王子市めじろ台の庭で育ち続けています。

新家屋で、勲が謄写版原稿を作っているのを見た記憶がありません。新宿区立淀橋第一小学校で二年間漢字教育を行った成果は大きかったのですが、「初めて聞く言葉を漢字仮名混り文で教えたことがこの効果を生んだ。」という確信は未だありませんでした。そこで、改めて一年生から標準的な、漢字仮名混り文の貼り込みをしない教科書を使う試みを始めました。そのため原稿作り目撃の記憶がないのではないかと思います。その結果は惨憺たるもので、勲が二回目に担任した生徒さん方には申し訳ないことですが、優れた成績が上がりませんでした。その犠牲によって、漢字仮名混り文の貼り込みこそが成果の要因であることを確信できたのです。

新居での生活

新築して暫くの後、居間の南に下屋が造られ、卓球台が置けました。週末は家族で卓球を楽しみましたが、この時初めて勲の網膜剥離を意識するようになりました。勲は、小さな子供が相手なのに、強い球を打ってきます。「片目でしか見えていないので、距離感が無く、長いラリーはできない。」と、勲は言っていました。それも理由でしょ

うが、勝負に負けたくないという気持ちも強かったのではないかと思います。母・泰子は父・勲のことを「喧嘩っ早い」とよく評していましたが、勝負に打ち込む姿を見ての感想だったようです。勝負に打ち込む勲は、仕事においては人に穏やかに接する人でした。

この頃、峻は勲から将棋と囲碁と連珠(通称:五目並べ)を教えて貰いました。将棋の駒の進め方、囲碁で地を確保する原理、連珠の禁じ手と相手をそこに導く戦略などは、細かく丁寧に教えてくれましたが、勝負には全く手加減を加えてくれませんでした。それでも、連珠では時々勝つことができましたので、未だに興味は続いています。将棋と囲碁は、直ぐに負けてしまうためか、深く興味を持ち続けることできませんでした。その所為か、観戦を楽しむことはできますが、自身で将棋や囲碁を打つだけの集中力が続きません。連珠の勝負の時間が峻の集中力の限界のようです。

この頃、峻は勲から図鑑を買って貰いました。八王子市万町の家
の西側は傾斜地になっていて、笹が茂っていました。笹をかき分けて登っていくと、南隣の東源寺の裏山の墓地に繋がっていました。ここには昆虫や小動物がたくさんいて、それを目撃しては家に戻り、図鑑を開いてその名称や行動の特性を調べ、比較確認することを楽しんでいました。これが将来ロケット技術者に進み、自然現象を捉えて制御の方法を考える上での基礎を作ったのであろうと思います。潤沢とは言えない生活資金の一部を割いて、図鑑を買ってくれた勲と泰子に感謝しています。

この頃の父・勲は淀橋第一小学校での第2次実験に取り組んでいました。教科書の平仮名部分に漢字を張り込むことを止め、その儘の教科書を使いました。その結果は惨憺たるもので、生徒たちは平均的な学習成績だったのです。ただし、これは後に勲の著書を通じて知ったことで、峻の日常生活での勲の思い出は殆どありませんでした。一方、峻の日常生活は大変多忙になっていました。幼い頃に、母・泰子に教えられてピアノを練習しましたが、直ぐに練習しなくなっていました。音楽的素養の育成に熱心だった泰子は、小学校4年の頃にバイオリンの練習に通わされることになりました。一応きれいな音が出せるようにはなりましたが、中学受験を優先してバイオリンは5年生で中断しました。その後は先ず従兄弟である奈良輝夫が、峻の通う第三小学校の教諭に赴任したこともあって、毎週末に家庭教師をやっ
て貰うようになりました。これが暫く続いた後、模擬試験を受け始めました。最初は京王線の下高井戸にある模擬試験会場に通い、後に新宿の精華学園を会場にした模擬試験会場に通いました。ここで一度だけ二番の成績を上げ、次の受験料が無料になったことを覚えています。そんな支援のおかげで慶応義塾普通部の受験に合格し、横浜市日吉にある普通部に通学するようになりました。

勲の転勤と活動範囲の拡大

1959年、前述の峻の慶応義塾普通部入学と同じ年、勲は新宿区立四谷第七小学校に転勤になりました。淀橋第一小学校で最初に行ったのと同じように、仮名書きの教科書に漢字仮名混り文を貼り込んでいましたが、家でその作業を行っている姿を見た記憶がありません。峻が自身の活動に多忙だったためかも知れませんし、勲が学校で作業していたためかも知れません。また、前年に文部省が告示した指導要領の付属書「教育漢字学年別配当表」の注記に、「学齢に達する迄提示してはならない」とされています。施行は3年先になるものの、勲が行ってきた「仮名書きの教科書に漢字仮名混り文を貼り込む」方式は、告示に反する行為になります。これを続けるのは難しさが増していたに違いありません。

文部省の方針が勲の思いと反対の方法に変化する中、文部省の方向に異を唱える人々の活動も活発になっていました。転勤の年の11月に「国語問題協議会」が発足し、翌年の1960年3月にはその理事会で自身の漢字教育について発表し、12月にはその講演会で漢字教育に関する講演を行っています。また、翌年の12月に福田恒存さんが「私の国語教室」という著書を発行し、その半年後に勲が「私の漢字教室」と題する著書を発行しています。原稿の作成には半年では済まないの、「私の国語教育」に触発されて書き始めたのではなく、示し合わせて作ったのではないと推測します。多分、出

版社の奨めに応じて題名を決めたのだと思います。ただ、福田先生と相互に知り合うきっかけになり、活動領域を広げる助けになったと推定します。このように、石井勲の漢字教育が世の中に広く知られるようになり始め、学校の外での活動は益々忙しくなっていたのです。

勲の転勤と峻の普通部入学のこの年、夏頃に家の西側に一棟増築することになりました。一階は祖母きく江が暮らす場所で、居間と台所と便所があったのだらうと思います。その上に一部屋が造られ、母屋の二階の廊下と繋がっており、峻はここを就寝と勉強に使うことになりました。この時代に自分の部屋を与えられるのは、大変な贅沢だったと思います。優遇された身で言えることではありませんが、普通部入学の褒美という訳ではなかったようです。多分、祖母・きく江の健康状態が思わしくなくなり、鳥沢に一人暮らしさせられなくなったのが主な理由だったと思います。また、増築の一年半ほど前に、父・勲は妻・泰子と共にきく江と養子縁組していますが、これも増築の直接的な動機ではなかったと思います。ここでのきく江の生活は、家族四人とは切り離されたもので、食卓を共にした記憶はありませんが、本屋に入らなかったということもなかったと記憶しています。

また、きく江は雲雀^{ひばり}を飼っていました。今は野鳥を飼うことは許されていませんが、当時はそのような法律はありませんでした。ある日、この雲雀が餌やりの時に籠から飛び出していました。暫くして庭に戻って来たそうです。それを当時飼っていた猫が捕らえてしまったそうです。気付いたきく江が雲雀を取り戻したのですが、暫くして死んでしま

いました。籠に戻された雲雀が籠の底に横たわって苦しそうに呼吸しているところを目撃しましたが、その他はきく江から聞いた話です。

峻の日常生活も多忙になり、父・勲の活動を見る機会はなくなっていました。普通部の二年生からはバレーボール部に入り、12月の中等部との対戦ではランニング・ドライブ・サーブで活躍して、次期のキャプテンに選ばれました。ところが、その冬休みに風邪をひいて、急性腎炎になってしまいました。四か月入院して健康は取り戻したのですが、激しい運動は禁じられてしまい、バレーボール部は退部することになりました。

復学して、激しい運動を禁止された峻は、生物研究会に入部しました。日吉のキャンパスの周辺には多くの緑が残されていて、昆虫採集ができました。昆虫採集を楽しむには、対象を絞る必要があります。峻は対象を蛾に絞りました。蝶や甲虫は綺麗ですが、誰もがやっていることです。蛾を集めているうちに気付いたことは、同じ種類でもその色が大きく違うところでした。遺伝が定着しきっていないようです。また、峻には大きな利点がありました。八王子は緑が多く、様々な昆虫が生息していました。庭に植えられた鳳仙花^{ほうせんか}には蜂や蝶や甲虫が集まりましたが、スズメガも集まりました。また自室の南のベランダに敷布を張り、蛍光灯を点けると蛾が集まってきました。普通部では夏休みの期間を利用して労作展に出品することが行われていましたが、蛾の標本の陳列は高く評価されて、受賞することができました。

綱島への転居

峻が腎炎から回復して復学し、半年ほど片道1時間半の通学を続けていましたが、両親は、この通学は峻の健康上無理があると考えたようです。1961年の秋、神奈川県横浜市港北区綱島の鶴見川沿いの田畑を整地して、大規模な住宅地が造られたところに新居を購入しました。東横線の綱島駅を降り、目の前の中原街道を右に進むと直ぐ鶴見川を渡ります。その土手を右に曲がり、少し歩くと左に土手を降りたところに、碁盤の目の様に直交した道に囲まれて百戸程同じ造りの家が並ぶ、大規模な新興住宅街にありました。峻の通学は東横線一駅だけで極めて楽になりましたが、家族は夫々大変だったと思います。

父・勲は四谷第七小学校に勤務していましたから、綱島から渋谷まで東横線で、山手線に乗り換えて新宿へ、中央線快速に乗り換えて四谷へという^{みちのり}道程になります。八王子からだと中央線快速で乗り換え無しで着きますが、転居後は同じ位の時間で到着するものの二回も乗り換えなければならなくなりました。母・泰子は転勤先を東京都の中で選んだので、東横線の都立大学駅から徒歩十分ほどの目黒八中に通うことになりました。八王子の時の徒歩十分だけとは極めて大きな違いです。更に大変だったのは妹・倫子でした。母・泰子が地元の小学校に倫子を通わせるのを嫌がり、泰子の勤務先に近い目黒の小学校に越境入学させたのでした。毎朝、泰子と倫子は連

れ立って通勤通学し、倫子は学校が終わると泰子の勤務先の中学に行き、勤務が終わるまで待って、二人で一緒に帰宅しました。これが酷く大変だったのか、暫く後に泰子は自動車運転免許を取り、トヨタのパブリカを購入して、倫子を乗せて車通勤するようになりました。

勲が「私の漢字教育」を発刊したのは、綱島への転居の直前で、続けて「一年生でも新聞が読める」の著述に取掛っていたようです。峻は自身の生活に忙しくて、勲との会話の時間が殆どありませんでしたが、忙しさは一層増していたようです。著書の力は甚大だったようで、また、福田恒存氏などの著名人から賛同の意思表示を頂き、朝日新聞の学芸欄に「漢字とカナ問題」を取り上げて頂き、更に、少年マガジンに連載を始めました。それを見た全国の小学校で石井方式を試みるところが多数出てきました。きっと綱島で過ごした1961年から1963年の三年間、著述に打ち込む原動力になっていたのだと思います。その努力の結果、1963年3月に「一年生でも新聞が読める」を刊行できましたが、代わりに胃潰瘍を悪化させて手術を受けなければならなくなりました。胃の三分の二と十二指腸を切除したと聞かされました。ほんの少しの食事をとると一杯汗をかき、暫く休まないで動くことができませんでしたし、一日五回に分けて食事をしなければならませんでした。これで四谷まで通勤するのはとても無理だということで、母・泰子が勤務先から遠くない、目黒区清水町の建売住宅を探してきました。

三年間の綱島生活は、峻にとっては大変充実したものでした。慶應義塾高等学校に進み、普通部の時と同じ日吉駅で降り、反対方向に歩けば直ぐ校舎に着きます。極めて楽な通学でした。激しい運動を禁止されていたので、友人にも勧められて楽友会という混声合唱団に入りました。慶応高校は男子校ですが、三田にある慶応女子高校と一緒に混声合唱をやっていたのです。峻は中高と男子校で、大学と大学院では機械工学を専攻しましたので、女性の学友は皆無でした。唯一女性と交流できる場が楽友会で、優れた女性たちと知り合う貴重な機会でした。

目黒区清水町への転居

勲が胃潰瘍の手術から回復する中で、一家は東横線の学芸大学駅から南に徒歩10分ほどの目黒区清水町に転居しました。狭い土地一杯に建てた二階家で、4LDKになっていました。建設業者の建売住宅で、三軒並んだ真中の家でした。母・泰子の勤務先に近く、妹・倫子の通学先にも近く、父・勲の通勤にも負担が少なく、峻の通学にも東横線一本で可能な場所でした。峻だけが楽をした綱島の家とは異なり、家族の誰もが通勤通学が楽になった住まいでした。

母・泰子は通勤が楽になった為か、ピアノ教室を再開しました。そして、念願だったグランドピアノも購入しました。一階の南側の部屋はグランドピアノと応接セットで一杯になり、峻は二階の自室で殆どの時

間を過ごしていました。その為か、ピアノ教室での出来事は全く記憶に残っていません。

父・勲の動向についても、当時の記憶は殆どありませんが、著書をはじめ多くの情報が残っています。新潟の亀田東小学校も石井式を開始し、国語問題協議会でその成果発表が行われました。文部省が漢字学習の制限を強めるのに反して、漢字を積極的に提示していくという「石井勲の漢字教育」への賛同者も増え続けていました。1936年3月に第二作目の著書「一年生でも新聞が読める」を刊行しましたから、世の中に「石井式の漢字教育」が更に広く知られるようになったのです。そして、1966年3月4日には朝日新聞の社説で『「石井方式」を考える』という表題で取り上げて貰いました。この記事の中で石井方式の最も大切な部分が紹介されています。それは、『この方式は、よく「漢字を教える教育」のようにいわれているが、そうではない。「漢字で教える教育」なのである。その結果として低学年の子供たちが、意外に早く、多くの漢字を覚えるということなのである。』ということなのです。実はこれが極めて難しいことで、石井勲の活動を継承して下さった誰もが具現できなかつたのです。「子供たちが多くの漢字を覚えた」ことは「子供たちが書いた漢字」を見て初めて分かります。これを見ることは大いなる喜びですから、さらに多くの漢字を書いて貰いたくなるのが自然な感情です。これを上手に抑えないと「漢字を教える教育」になってしまうのです。石井勲の活動を継承して下さった方々の多くは、『石井式は「漢字で教える教育」です。』と仰って下さ

いましたが、実現は難しく、どうしても「漢字を教える教育」になってしまうのでした。

社説で取り上げて頂いたすぐ後、勲は新宿区東山小学校に転勤しました。ただ、この小学校での勤務は一年間で退職し、小学校教諭の生活を終了させたのです。退職後すぐに母校である大東文化大学に講師として迎えて貰いました。父・勲が「これからは著作を中心にしていきたい。」と言っていたのを覚えています。この頃なのか、もっと前なのか分かりません。いずれにしても、勲は現場で自ら教壇に立って、生徒の反応を自らの目で捉えてデータ収集を行う必要が無くなって来ていたのでしょう。つまり、これまでの小学校教諭として行ってきた、教育原理の探求の段階を終了し、確立した教育手法を広める活動へと変換したのだと思います。

小学校退職後も幼稚園や保育園に通う小さな子供たちに向かって漢字を示しながらお話を聞いて貰うことは続けていきます。ただ、「漢字で教える教育」の原理を貫きつつ、小学生より幼い子供たちにも対象を広げていったのです。

実際は、教育対象の年齢の下限は無く、上限は概ね十歳前、いわゆる「つの付く内」ということですが、確認できたのはずっと後のことでした。